



Photo / Kota Sugawara

夢中になる 創造の世界

青柳いづみ

Aoyagi Izumi

PROFILE 1986年生まれ。桜美林大学にて演劇を専攻。2007年、藤田貴大率いるマームとジブシーの旗揚げに参加。翌年、チェルフィッチュ『三月の5日間』ザルツブルグ公演に参加。以降、両劇団に平行して出演し、国内外で活動。マームとジブシーは独特の表現手法でも注目される劇団で、2013年に主演した『cocoon』は話題作となった。9月29日～10月13日、東京芸術劇場にて野田秀樹作、藤田貴大演出『小指の思い出』に出演予定。

中学から演劇畑。当時の担任に背中を押されて進んだ演劇専攻の大学で、2人の演出家との出会いがあった。「この人たちとともに作品をつくり続けたい！」その一心から舞台に立ち、現在に至る。

作品は、最終的に俳優である自分の表現を通してお客さんの目の前に現れる。その責任の重さもあり、本番は自分が削られるような感覚、つらい気持ちもあるようだ。「自分は何もつくれない。でも、

演出家たちと作品創造することで、思ってもみなかった形になる。演出家のやりたいことは、まだまだあるはず。それを一緒につくっていきたい。」

舞台は生のメディア、紙面や映像と違って一気には広がらないし、一挙手一投足が違わずに繰り返されることもない。演出家との共同作業で、一番面白い！と夢中に取り組んでいる「いま」をぜひみてほしい。

最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは9月から12月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2014
木ノ下歌舞伎『三人吉三』
2014年10月11日(土)12日(日) / 京都芸術劇場 春秋座
監修・補綴:木ノ下裕一 / 演出・美術:杉原邦生 / 作:河竹黙阿弥
デザイン:外山央

銀と黒で印刷された文字中心のシンプルなフライヤーだけに、手に取って読みたくなる。同じ吉三郎という名を持つアウトロー3人の物語を、3本のラインで表現したり、書体や紙の選び方など、細部まで凝ったデザインが素敵。人物相関図が複雑なので、フライヤーの裏面で予習してから観るといいかも。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



青年団『暗愚小傳』

2014年10月17日(金)～27日(月) / 吉祥寺シアター
作・演出:平田オリザ
デザイン:AD=工藤規雄 D(表面)=上野久美子
写真:佐藤孝仁

写真の素晴らしさに感動し、どうしても選びたかったフライヤー。よく見ると写っている鳥は剥製ののだが、逆にそれが良かったりする。鳥が2羽いることや富士山をバックにしていることで高村光太郎の「暗愚小伝」を想起させるし、タイトルの文字も凝っていて、写真の魅力を倍増させている気がする。



Always With Smile — AWS学生アカペラプロジェクトは、2011年3月の東日本大震災を受けて、歌うことを通して何かできないか、そういった思いが繋がったのがはじまりだった。発起人は、ゴスペラーズの北山陽一さん。WAVOC（平山郁夫記念ボランティアセンター）の支援のもと、2012年11月から月に1回、学生たちが気仙沼の仮設住宅の集会所などを訪れているほか、女川町や関東の学校や介護施設などでも活動している。

はじめての人も含め、毎回15人程度のメンバーで土曜の朝に東京を出る。練習は気仙沼に向かうバスの中だ。1

泊2日で2カ所を訪問し、アカペラを楽しんでもらったり、集まったみなさんと交流会をしたり、アカペラのワークショップを行うことも。メンバーの吉埜大空さんは、大学のプロジェクトで気仙沼の仮設商店街の情報発信に協力していた。AWSの活動を知って自ら参加するようになって、地域の人たちとの橋渡しも担った。「いろんな人と一緒に歌えるし、みなさんとお話ができるのも楽しい。アカペラは相手の声に耳を傾ける協調性が必要。自分の心をひらかないといけないし、心と心をつなげる力があると思う」

当初から参加していた高橋紀里子さんは、歌が好きだけ



ど、前に出るようなタイプではなかった。それが、去る3月の卒業まで学生代表を務め周囲も驚くほど成長した。「色々経験した分、後輩に教えてあげることでもできるようになった。毎月違う仮設住宅にうかがって、初対面の人と会話をするのにとまどったこともあった。でも、音楽は心に届いていると感じるし、空気が変わるのがすごい」

AWSは、30年は続けるのが目標。卒業後も無理をしないで参加を続けるメンバーもいる。「将来“気仙沼の人はハモるのが好き”となるぐらい楽しんでもらえると」そんな想いも膨らんでいる。